小説

豆富小僧

1　始めの説明は長いのである

妖怪を、知っているだろうか。

漫画やアニメ、小説なんかにぞろぞろ出てくるし、映画になったりもしているから、知らないという人は少ないだろう。

奇妙なスタイルをしていて、悪さをしたり悪戯をしたりする、ちょっと怖げな連中だ。

でも、妖怪はモンスターとかクリーチャーとか、そういうものとは違う。中には怪物っぽいのもいるし、時に凶暴だったりもするのだけれど、ハントしたりゲットしたり、そういうことはあんまりできない。だからそんなにカッコ良くない。

それから幽霊ともちょっと違う。全然違うというわけじゃないけれど、その辺は微妙だ。限りなく幽霊に近い妖怪もいるけれど、怨んだり、呪ったり祟ったり、そういうことはそんなにはしない。そもそも幽霊というのは元人間だ。でも妖怪はそういうこともない。

どう見たって下駄だったり茶碗だったり、動物や植物だったり、何だか判らないヘンテコなものだったりする。

そんなものは何を考えているのか判らないだろう。動物はともかく、下駄が考えていることなんか想像もできない。というか、下駄はものなんか考えない。

そんなのばっかりだから、怖いような怖くないようなものも多いし、ハズしたり笑えたりもするもんだから、妖怪というのはあんまり怪談向きじゃない。

どっちにしても、そういうわけの判らない連中は、結構昔からこの国に涌いていた。色んな時代、色んな場所で、騒いだりふざけたり人をおどかしたり、時には怖がらせたり、笑われたり馬鹿にされたり退治されたりしていた。

だからといって、妖怪は実際にいるわけじゃない。

捕まえて檻に入れたりはできない。要するに、存在しないのだ。

だからといって空想の産物ということでもない。特撮映画の怪獣や漫画のキャラクターのように、作家が考えて作ったものではないのだ。作ったというより、できちゃったというほうが正しいだろう。だから、版権フリーなのだ。妖怪なんてものは、いつの間にかなんとなくできちゃったようなものなのである。いい加減なのだ。

それでも、実際にいないんならやっぱり空想上のものじゃないのかよと、大方の人はそう思うだろう。

でも、少し違うのだ。

では、どのへんが違うのか。

妖怪は、何もかも空想というわけではないのだ。

例えば。

怖いなとか、不思議だなとか、変だなとか、悲しいとか嬉しいとか、がっかりしたとかうんざりしたとか、可笑しくって堪らないとか、そういう気持ちや感情、考えなんかは、誰にでもある。必ずあるはずだ。それをないという人はいないだろう。

でも、そういう気持ちや考えは、目に見えるものじゃない。

目に見えないというのは、透明だということではない。映画に出てくる透明人間なんかは存在するのに見えないわけだけれども、気持ちや考えというのは、そもそもモノとして存在しないから見ることができないのだ。見えなくて当たり前なのだ。ないのだから。

ないけれど、あるのだ。

あるけれど、形はないのだ。

そういう、気持ちや感情、考え、雰囲気だとか気分だとかいうものに、形はない。ないから見せられない。伝えようと思うなら、言葉にするしかない。でも、言葉でいくら細かく説明しても、そのものズバリは中々伝わらなかったりする。

そこで絵にしてみようと思いついた人がいた。百聞は一見にしかずというように、これが意外に判り易かったりする。悲しい気持ちに形はないけれど、悲しい気持ちを表現したキャラクター〈カナシイくん〉には形がある。〈カナシイくん〉は実在しないキャラクターだから実際にはいないのだけれども、〈カナシイくん〉が表している悲しい気持ちは、ちゃんとある。

妖怪というのは、そういうものである。

いないけど、いるのだ。

判りにくいかもしれないので、もう少し説明しよう。

その昔、妖怪はお化けとか、化け物とか呼ばれていた。

お化けとか化け物と呼ばれていた頃は、UMA（ユーエムエー）や幽霊との違いもあんまり明確じゃなかったから、色々一緒くたになっていて、それこそよく判らないヤツらだったのだけれども、その時代はUMAや幽霊なんかも今とは少し違っていたのだから、これは仕方がない。

それぞれだんだんとでき上がっていって、分かれたと考えたほうがいいだろう。

例えば。

夜中にトイレで変な音がして、とても怖かった、としよう。

でも、怖かったのは体験した人だけだ。他の人には判らないことだ。怖いということを伝えるためには、説明しなければいけない。上手に説明できて、他の人も怖いと感じたとする。

それが、怪談だ。

怪談は、聞いている人を怖くしようとして語られるものだ。

でも。

お話として聞く分には怖いのもオモシロいのうちだからいいけれど、現実にはどうだろう。

あんまり自分で体験したくはない人が多いのではないだろうか。怖い体験をした人はもうしたくないと思うだろうし、体験中の人は早く怖くなくなりたいと思うものだ。

それが普通だ。

そこで、体験者は色々考える。
音はどうして鳴ったのか。
理由が判れば、もう怖くはない。水道管が凍りかけていたとか、虫がいたとか、それは何でもいいのだけれど、音の正体が判明すれば、もう怖いことなどない。
でも、どうしても判らないことだってある。
科学がいくら発達したって、何でもかんでも判るようになったわけじゃない。
科学で解明できないことはないという考えかたは正しいだろうが、まだ解明できてないものは沢山あるのだ。いずれは判るのだろうけれど、まだ判っていないことは多い。
いや、人間はまだ、この世界の殆どの謎を解明できていないのだ。それは科学者が誰よりよく知っている。
だから、一般の人に判らないことなんかいくらでもある。
判らないと、人間は不安になる。不安を放っておくともっと不安になる。不安の元が怖さを伴っていたりすると、もっともっと不安になる。
トイレで聞こえた音の正体がどうしても判らなかったら、トイレを出てからも怖い。いつまでもずっと怖い。
もうトイレに行けなくなってしまったりする。
でも、トイレに行かないわけにはいかないので、人は何とか判らないという不安を解消しようとするもんなのだ。

方法はいくつかある。
一つは、錯覚だと考えること。
本当に錯覚かもしれないのだから、これは有効だ。
幽霊のせいにしてしまう人も多いけれど、それだと怖さはよけいに増すことになる。だからこれはあんまり有効ではない。怪談として怖がりたい時は有効かもしれないけれど、不安はあんまり軽減されない。まあ、お祓いをしたりお札を貼ったりして気がすむのならそれはそれでいいけれど、それでまた音が鳴ったりしたら、大変なことになってしまう。お祓いも効かない祟りなんだと思い込んじゃったりしたら、これはもう、怖いとか不安とかいうどころの話ではなくなってしまう。
そんなたいそうなことじゃないというのに。
トイレで音がしただけなんだし。
でも、大したことじゃなくたって、判らなければ不安は不安だ。
そこで、最後の手段である。
正体を作ってしまうのだ。
作るといっても、自分勝手に作ったのでは気休めにしかならない。そんなのは嘘だと、自分が一番よく知っていることになるからだ。だから、自分で考えて作れということではないのである。誰かが作ったものに乗っかれ、ということだ。
お化けの出番である。

便所には〈がんばり入道〉というお化けが出るのだと謂われている。それから、垣根で変な音をさせる〈クネゆすり〉だとか、ぱたぱたと何かを叩くような音を出す〈畳叩き〉だとか、人のいないところで妙な音を出すお化けは、昔から沢山謂い伝えられているのだ。

もちろん、そんなものは存在しない。

でも、存在はしないけれども、いる。

そういつらお化けは、そういう不思議な気分、怪しい気配、わけの判らないこと、そういった目に見えない、判りにくい、伝えにくいものなのである。判りにくくて伝えにくいから、名前をつけたのだ。〈畳叩き〉なんて、何の捻りもないそのまんまの名前だけれど、そういうものがいるのだとしてしまえば、説明はぐっと簡単になる。

それがお化けだ。

繰り返すけれども、存在はしないのだから、お化けだってどこかの誰かが作ったものに違いはない。でも、作っただけではダメである。

同じような気持ちになったり同じような体験をした人が、そうかコイツの仕業だったかと思えなければ、それはあんまり意味がないのだ。長い時間をかけて、大勢の人が、そうだよなそんな感じだよなと納得して、漸くそれはお化けとして認められるわけだ。

例えば、トイレの音の正体はがんばり入道だよと説明されたとして、まあそんなものはいないだろうさと思ったとしても、である。

昔の書物なんかを調べると、がんばり入道はちゃんと載っていたりするのだ。

本に載っているから本当にいるのだと思え、という話ではない。

迷信だよと笑い飛ばすことは簡単だ。でも、そんなことをいうのなら、幽霊だって五十歩百歩だろう。

そんな変なのが本に載っている以上、自分とおんなじ奇妙な体験をした人が他にもいたということになる。そこが肝心だ。お化けを通じて、大昔の人も自分とおんなじ不思議な気分を味わったのかもしれないということを、知ることができるわけである。

理由のほうは相変わらず判らないのだけれど、自分と同じ体験をした人が他にも大勢いるとなると、不安はかなり弱まるだろう。

そのうえ、何だか判り易い名前がついている。

のみならず、絵まで描いてあったとしたらどうだろう。

これは、益々判り易い。

「そうそう、こんな感じだよ！」

と、いうことになると、理由なんか判らなくても、何だかそれでいいような気になってくるものだ。こいつのせいでいいや、ということになれば、多少気味が悪くても、そんなに怖くはなくなるだろう。

そのうえ、退治する方法やなんかも書いてあったりすると、いっそう怖さは薄れる。元々いないと判っていても、いると仮定して、それも避けることができるとしておくならば、もうそんなに怖くはないだろう。

同じ体験でも、怖さを伝えようとすれば怪談になる。
一方で、お化けのせいにしてしまうと、あんまり怖くなくなってしまう。
怖いことを怖くないものにするために、お化けは作られたといっていいだろう。
でも、作ったのは個人ではない。大勢である。それから一度にできたわけでもない。長い長い時間がかかっている。何人もの人が、だらだらと時間をかけて、気がついたらいつの間にかできちゃっていたという、だらしないのがお化けなのである。
そして一番の特徴は、創作されたのは名前や形だけ、というところである。その、元になっている何かは、目に見えないもの、気分や雰囲気や、感情や考えや、そうしたものなのだ。
そうしたものは、あるのだ。
特撮映画の怪獣や漫画のキャラクターは、全部まるごと創作だ。
でも、お化けはそうではないのである。名前や姿形は創作だから、そのへんは特撮映画の怪獣や漫画のキャラクターと似ているのだけれど、それでもやっぱりどこか違うのは、そのせいだ。
お化けは目に見えない、形のない、説明しにくい色々なものを、判り易く、怖くなくするために生み出されたものなのだ。
だからお化けはオカルトや心霊とも違うのだ。お化けは、怖がらせるためだけに生まれたわけではない。寧ろその逆だ。UMAと違って絶対に実在はしないから、捕まえようったってそうはいかない。

なんたっていないのだ。いないけど、いるのだ。
河童なんかはUMAっぽいところもあるから捕まえられそうな感じもするけれど、UMAとしての河童とお化けの河童は、やっぱりどこか別物なのだ。
幽霊とも違うのだ。怪物とも違うのだ。いや、ある時期は同じものだったし、今でも混同されるんだけれども、途中で分かれてしまったのである。どこが違うって、お化けはひたすら怖いだけのものでもないし、そんなに凶暴でもない。そこがまるで違う。
退治するのに武器は要らない。
というか、武器なんかは無駄だ。
くだらないことで消えたりする。
夜道を一人で歩いていると、背後からもう一つ、自分の足音ではない足音が聞こえてきたりすることがある。
足音はずっと後ろをついてくるのだが、振り返ると誰もいない。
これは、ちょっと怖い。
振り向いて誰かいたとしても、いた人によってはそれはそれで怖いのだろうが、人がいないのに足音だけするというのも、まあ怖いだろう。
これは、奈良県では〈べとべとさん〉というお化けの仕業だとされる。
べとべとさんは別にそれ以上のことはしない。齧ったりしないし殴ってきたりもしない。というか、姿がないのだから何もしようがない。音だけなのだ。

そのうえ、べとべとさんについてこられても、正直困ることはない。
べとべとさんに出会ったら三日以内に死ぬとか、病気になるとか不幸になるとか、そういうことはまったくない。
ただ気味が悪いだけだ。
で。
こいつをやっつけるのは、驚くほど簡単なのだ。ロケットランチャーもマシンガンも要らない。おまじないもお札も要らない。効かないというより、要らない。
ちょっと道をあけて、たった一言、
「べとべとさん先へお越し」
と言えば、べとべとさんはいなくなる。
呪文もお経も一切必要ない。後ろからついてこられると気持ち悪いから自分を追い越して先に行ってくださいと、モロそのまんまお願いしているだけである。で、べとべとさんは素直に行ってしまうのである。あっさりしたものだ。
そんなもんなのだ。
お化けなんてものは。
何度も繰り返すけれども、べとべとさんは実在しない。でも、べとべとさん的な現象というのは起こる。音の反響次第で自分の足音が遅れて聞こえることはあるし、別の音が足音に思えることだってある。何も起きなくたって臆病な人の耳には足音くらい聞こえるだろう。

幻聴でも錯覚でも、聞こえてしまったらいるのだ。何かいると思うよりないのだ。何かいると思ってしまったら、まあ怖いのだ。いるのにいないんだから、怖いし不安だし手の施しようがないのだ。
でも、べとべとさんだということにしてしまえばどうだろう。
もうそんなに怖くないだろう。
おまけに、愉快な姿形が与えられていたらどうだろう。
それでも、最初は気味が悪いかもしれないけれど、
「あいつかよ」
と、思えたならばそれで終わりだろう。
そうやって、全国各地で色んなお化けが生み出された。
それぞれ勝手にでき上がるのだから名前も、姿形も、最初はまちまちだったのだけれど、そのうちにだんだん洗練されていった。
見越し入道。
ろくろ首。
一つ目小僧。
カラカサお化け。
化け猫。
天狗に河童に狐に狸。

こういう奴らが、お化けの代表としてメジャーなところで活躍し始めた。江戸時代の後半くらいのことだ。他にも沢山お化けはいたが、ローカルな連中はマイナーで定まった形がなかったりしたので、地元からは中々出てこられなかったのである。そういったマイナーなお化け達が、一匹ずつというか一人ずつというか、ちゃんと注目されて、それぞれキャラ立ちすることができたのは、それからずっと後のことである。

砂かけ婆。
児なき爺。
一反もめん。
塗壁。

どこかで聞いたことのある名前ばかりだろう。彼らはずっと、マイナーローカルお化けだったのだ。でも、漫画やアニメを通じて、今やすっかり超メジャー、スター待遇になってしまったのである。昭和の中頃のことである。

それまで、定まった姿形もなければ、ぼんやりとした名前ぐらいしかなかった、適当でぐだぐだなローカルお化けが、ちゃんとしたキャラ造型と、しっかりした名前を手に入れたのである。

それこそが、妖怪なのだ。

因みに、妖怪は版権フリーだが、漫画のキャラクターデザインには版権があるから、間違えないようにしたい。

何だかえらく長い前振りだったのだけれど、このあたりのことを覚えておかないと、これから先のお話は少しばかり判りにくくなるのである。だから勘弁して欲しい。

それでは、お話を始めさせていただこう。